

次の文章は、行為における身体の独自性について論じたものである（ただし、一部省略した箇所がある）。これを読んで、後の設問に答えよ。

身体の独自性について不用意に答えるならば、次のような答えが返ってくるかもしれない。――私の身体は私の意志に従う。しかし自分の身体以外の物体はそうではない。私は自由に手を動かすことができる。しかし、目の前の机や本はそうではない。

だが、「私の身体は私の意志に従う」とは意味不明でしかない。いったい、身体が何に従うというのだろうか。アンスコムは、こうした常識的見解を次のようにきわめて鋭く批判している。

意志の作用によって腕を動かすことはできるがマッチ箱を動かすことはできない、と言われることがある。だが、もしその発言で「マッチ箱を動かそう」と意志しても、マッチ箱は動かない」ということを意味しているのなら、答えはこうだ。「マッチ箱を動かそう」と意志したのと同じように、腕を動かそうと意志しても、腕もやはり動きはしない。あるいはその発言で「私は腕を動かすことはできるが、マッチ箱を動かすことはできない」ということを意味しているのなら、答えはこうなる。「私はマッチ箱を動かすこともできる。――こんな簡単なことはない」

意志することが何かを念じることだとするならば、もちろん、念力でもないかぎり「マッチ箱を動かそう」と念じただけでマッチ箱は動きはしない。しかし、まったく同様に、腕を見つめて「腕よ動け!」といくら念じても、私の腕はびくりとも動かないのである。他方、実際に腕を動かしてみせるというのなら、私はマッチ箱のことも動かしてみせる。机の右? よろしい。左? 造作もない。マッチ箱はまさに私の「意のままに」動くのである。

もちろん、私の意のままには動かないものも多くある。たとえば私は東京タワーを動かすことはできない。しかし、私は自分の耳を動かすこともできない。身体の中の部分もまた、私の意のままにはならないだろう。「意のままになる」という観点から見たときに、いったい私の身体と身体ならざるものたちとはどう違うのか。それは一見してそう思われるのに反して、実はいささかも違いはしないのである。

アンスコムのこのシテキは、「意志作用」なるもののクウキヨさをめぐりに示している。だが、それでもなお、身体とマッチ箱がまったく同等に扱われてしまえば、それもまたアヤマリと言わざるをえない。身体とマッチ箱とはどこか異なる身分をもっているはずである。

では、それは何か。

われわれがアンスコムの議論に感じる最大の「ずるさ」は、彼女がマッチ箱を動かしてみせるところにある。アンスコムは目の前のマッチ箱を無造作につまんでひよいと動かす。そして彼女は言う、*“nothing easier!”* けれど、「つまんで動かす」というのはインチキではないだろうか。いや、別にインチキではないが、まさにここにポイントがある。

私はマッチ箱を動かすこと（において）私の腕や指を動かしている。すべての意図的行為は、そこにおいてなんらかの身体動作を含んでいる。私は、この点に身体動作の独自性を見いだす。

私が何かを意図し、その意図の実現について考慮し、調整・制御している場面では、むしろ身体動作は意識されないだろう。私はけっしてまず身体動作を制御し、それによって歩いたり自転車に乗ったりするのはない。私は周囲のようすに意識を向けながら、歩調を変えたりハンドルの切ったりする。そこで、はむしろ身体動作は「透明化」している。

これに関連して興味深いのが「熟達」ということである。たとえば、「変化球を投げる」という事例を考えてみよう。初心者は、まずボールの握り方、手首のひねり方、投球のフォーム等々を分解して教わり、それらをいちいち意図的になぞりながら、全体として変化球の投球を試みるだろう。そのような場合には、その人はかくかくにボールを握り、しかじかに手首をひねり等々をなすことによって、変化球を投げる。しかし、この「によって」関係は初心者を記述する仕方であり、熟達者はもはやそのように記述されるべきではない。熟達者は端的に「変化球を投げる」のであり、そのとき自分がどのようにボールを握り、どのようにひねっているのかはむしろ自覚されないだろう。しかしもちろん、彼は変化球を投げることに、特定の仕方でボールを握り、手首をひねっているのである。このように、初心者を記述する場合と熟達者を記述す

て、透明化していた身体が立ち現れる。われわれは、まさに「身体を張って」行為するのである。

（注）アンスコム：イギリスの哲学者（一九一九―二〇〇一）。

nothing easier: ...こんな易しいことはない、の意。

リハビリテーション：事故や病気などで障害を負った人の心身を回復させるための治療や訓練。

問一 ― 線 a-e の漢字と同じ漢字を含むものを次の各群の A-オから一つずつ選び、記号で答えよ。

a シテキ		b クウキヨ		c アヤマリ		d オビる	
A	スイテキが落ちる。	A	キヨダクを得る。	A	ニンタイ強い性格。	A	道路がジュウタイする。
イ	テキカクな指示。	イ	キヨマンの富。	イ	事実をゴニンする。	イ	タイダな生活。
ウ	汚職をテキハツする。	ウ	キヨシユウを決めかねる。	ウ	人権をヨウゴする。	ウ	教室でタイキする。
エ	テキタイする勢力。	エ	イゴを楽しむ。	エ	カクゴを決める。	エ	ネッターの植物。
オ	テキオウ能力が高い。	オ		オ		オ	

る場合とでは、その記述の仕方は異なり、そのもつとも大きな違いは、「によって」の関係から「において」の関係へと移行する点にある。

そして、「において」の関係に移行するということは、広い意味においてそれが身体性を帯びることであると言えるだろう。それゆえ、熟達の度合いが増せば増すほど、一般に身体は延長されていくのである。逆に、熟達の度合いが減少すれば、身体はふだんのこの五体よりも縮小されることになる。リハビリテーションの場面などはそうしたケースにはほかならない。

身体の独自性は、なによりもまずそれが意図的行為において透明であるという点に存している。身体動作そのものが意図的になされる場合、たとえばリハビリテーションにおいて意図的に腕を上げるような場合には、なるほど身体動作が意識的になされ、ふだん透明なその姿が不透明に現れてくるだろう。しかし、身体はそうして姿を現すことによって、かえってマッチ箱と同じ身分になる。リハビリテーションにおいて私は、マッチ箱を動かすようにして、いや、マッチ箱よりも意のままにならないものとして、この腕をもち上げるのである。だが、透明なものとしてヒカえているというだけでは、行為における身体的重要性はまだ浮かび上がってこない。ここで、行為における身体の方に重要な光を当てるもうひとつのポイントが、「責任」という観点である。「責任」の名のもとに、透明であった身体はその姿を浮上させるのである。

私が友人に挨拶しようとしてタクシーを停めてしまったという場面を考えよう。私は友人に挨拶すること（において）手を上げた。そして手を上げること（によって）タクシーに合図をした。そしてその結果、私は意図せずして停めてしまったタクシーの運転手にわびる。ということは、すべての意図的行為には身体動作が含まれているのであるから、さらにその身体動作から生成される行為はすべて私の責任の範囲ということになる。虫を追い払おうとして私は腕を振る。そして腕を振ったことによって隣の人をおっつけてしまったならば、私はそれに責任をとらなければならない。意図的行為において身体動作がなされ、その身体動作が意図せぬ結果を引き起こすとき、この「において」の関係とその不透明化の仕方は初心者やリハビリテーションの場合の不透明化とはまったく異なっている。こうして、多くの責任が身体動作を経由して発生し、「において」の行為生成の方向が「によって」の方向へと折り返す独特な地点とし

